

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第181号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成27年9月21日

アカガシラサギ



2015. 6. 6 札幌市北区 東屯田川遊水地

撮影者 鹿川美咲 (江別市)



も く じ

北海道を通過するマガン

宮島沼水鳥・湿地センター	牛山 克巳	2
表紙の鳥 (アカガシラサギ)	江別市 鹿川 美咲	4
ウトナイ湖のガン類	公益財団法人日本野鳥の会 保全プロジェクト推進室	
ウトナイ湖サンクチュアリ	チーフレンジャー 中村 聡	5
十勝川下流域のガン類		
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	副支部長 千嶋 淳	7
野幌森林公園でブッポウソウ	札幌市清田区 坂本由美子	9
シルバ通信⑦	道央地方に分布するアカモズの重要性	
北海道大学農学部森林科学科	北沢 宗大	10
鳥の名前の話	-最終回-	
森林総合研究所北海道支所	川路 則友	11
探鳥会ほうこく		13
探鳥会あんない・鳥民だより		16

北海道を通過するマガン

宮島沼水鳥・湿地センター 牛山 克巳

マガンの数と分布の変化

戦後、高度経済成長に伴う国土の改変によって生息地を奪われ、ガン類の飛来数は激減し、日本各地から姿を消した。1970年にはガン類の飛来総数は約5,000羽と言われ、1940年代の推定飛来数から9割以上減少したと考えられている。マガンは1971年に狩猟鳥から外され、天然記念物に指定されると、個体数の減少が止まり、1980年代には増加に転じ始めた。その後も増加傾向は続き、現在ではマガンの越冬数は15万羽を越え、20万羽とも言われるようになっている。

この間、北海道を通過するマガンの数と分布も様変わりしている。石狩川流域では、1960年代にはマガンは石狩管内当別町の水田地帯で採食し、石狩市厚田区望来沖の海上でねぐらをとっていたとされる。宮島沼でねぐらを取り、その周辺で採食するようになったのは1970年代後半からである。その後、宮島沼のマガンの最大飛来数は、1975年の4,000羽から、1990年代には3万羽、2000年代には6万羽を越えるほどに増加し、2015年春には過去最高となる約8万羽を確認している。

かつては宮島沼の最大飛来数と国内越冬数はほぼ同数であり、国内で越冬するマガンのほとんどが宮島沼を中継して渡っていた。しかし、1990年代半ば以降は国内越冬数が宮島沼の最大飛来数を上回るようになり、マガンは宮島沼から道内各地に分散するようになった。石狩川流域では、マガンは1980年代には宮島沼周辺のみで見られたが、1990年前後から茶志内沼や袋地沼など周辺湖沼も利用するようになったとされる。以降のマガンの分布拡大と飛来数の増加は道内各地でも見られ、十勝川下流域では1990年半ば以降マガンが大幅に増加したとされ、最近ではサロベツ原野を利用するマガンも大幅に増加した。

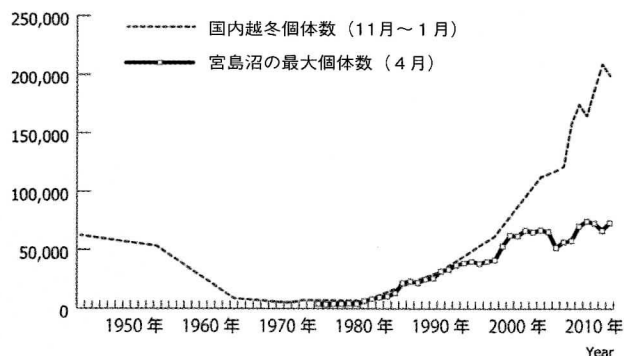


図1. マガンの国内越冬数と宮島沼における春の最大飛来数。過去の調査資料や、未発表の調査記録を元に作図。

道内を通過するマガンの現状は？

このように、近年になって北海道を通過するマガンの数と分布は大きく変化しているが、その全体像は明らかになっておらず、北海道を通過するマガンの総数もわかっていない。最近ではウトナイ湖で春先に10万羽を超えるマガンが数えられるようになったので、少なくともそれだけのマガンが北海道を通過しているのは確かだろう。しかし、それだけでは国内越冬数よりまだ少なく、北海道を通過せず、本州から大陸に直接渡っているマガンもいるのではないかという推測もできる。マガンの数と分布、そして移動経路の変化は東アジア全体でも起きており、その実態を解明するためにも、北海道を通過するマガンの状況を明らかにすることが重要になっている。

また、道内各地でマガンが増加するに伴い、様々な課題が顕在化している。宮島沼周辺では古くからの課題であるマガンによる小麦被害であるが、牧草への被害も含め、現在では農業被害問題が各地で顕在化している。一方では、「害鳥」であるマガンへの懸念から、各地でその生息地の

改変等を容認する声も聞かれ、マガンを誘引する恐れのある湿地の保全・再生活動が円滑に進まない要因ともなっている。これらマガンを取り巻く課題は同所的に生息するシジュウカラガンやハクガンなどの希少ガン類の保全にも通じることであるが、マガンの個体数は今後も増加すると考えられていることから、総合的な対策を講じるための実態把握とモニタリングが急務となっている。

このような経緯から、今年の春、道内におけるマガンの一斉調査を企画し、北海道野鳥愛護会のみなさまをはじめ多くの方々の協力のもとに大きな成果を得ることができた。この場を借りて厚く御礼申し上げるとともに、その成果をご報告したい。

北海道マガン合同羽数調査

調査は、2015年3月28日(土)と4月25日(土)に実施した。それぞれウトナイ湖におけるマガンのピーク、宮島沼と十勝川下流域におけるマガンのピークにあわせて調査日を設定した。地域の実情によってマガンのカウント方法は異なると思われるため、なるべくダブルカウントが起らないように以下のように調整した。

- 1) 調査日当日のねぐら入りカウント
- 2) 調査日翌日の飛び立ちカウント
- 3) 調査日当日の採食地でのカウント

調査は、ガン類関係者のメーリングリスト (Janet) を通じて呼びかけた他、重要な飛来地の関係者に個別に呼びかけた。

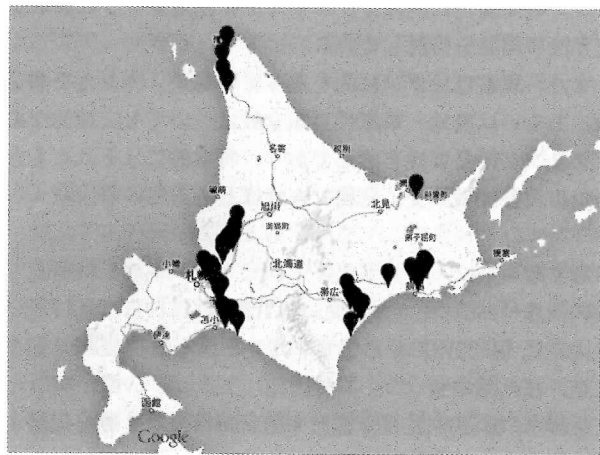


図2. 合同調査の調査地。現在は大規模飛来地に調査地が集中しているが、小規模飛来地の情報も収集したい。

第一回調査の結果

32箇所で行われ、マガンの合計羽数は64,334羽であった。調査日をウトナイ湖のピークを狙って設定したが、ウトナイ湖では約1万羽のマガンが確認できたものの、すでに周辺からほとんどが抜けた後で、石狩川流域に広く分散していた。石狩川流域では46,697羽確認したが、調査のできなかった奈井江火力発電所の沼(通称「奈井江袋地沼」)やトイ沼もねぐらとして利用していたので、2～3万羽は数え落としていると考えられる。雪の

残っていた十勝川下流域にはまだマガンが集結しておらず、調査のできなかった歴舟川下流域などで数え落としが生じていた可能性がある。

第二回調査の結果

36箇所で行われ、マガンの合計羽数は113,085羽であった。調査日を宮島沼と十勝川下流域のピークに合わせて設定したが、いずれも渡りが始まっていた。サロベツ原野では過去最高となる羽数を記録できたが、道外に抜けたマガンも少なからずいたと考えられる。それ以外は目立った数え落としはなかったと思われるので悔やまれる結果となったが、ウトナイ湖以外で10万羽を超えるマガンが数えられたのは今回が初めてのことであり、大きな成果となった。

表1. 合同調査の結果

	第一回調査 (2015. 3.28)	第二回調査 (2015. 4.25)
ウトナイ湖・千歳川流域	14,479	0
石狩川流域	46,697	59,240
サロベツ・道北	4	44,107
十勝川下流域	3,154	9,518
釧路・オホーツク	0	220
計	64,334	113,085

2015年春のマガンの飛来傾向

マガンの春の飛来は、その年の積雪の状況に大きく影響される。昨シーズンは全体的に少雪傾向となり、マガンの移動も早かったため、上述したように各地のピークに調査日をあわせることができなかった。ここでは一斉調査の結果を補完する意味で、各地におけるマガンの飛来状況をまとめる。

札幌管区気象台の「2015年冬(2014年12月～2015年2月)の天候」によると、昨シーズンの冬の降雪量は「太平洋側で平年より多くなった所もあった」が、「日本海側とオホーツク海側では平年よりかなり少なく、北海道平均では平年比83%と少なかった」とあり、マガンの飛来地では、十勝川下流域では遅くまで積雪が残ったものの、ウトナイ湖から石狩川流域にかけての石狩低地帯とサロベツ原野では少雪傾向となった。

少雪傾向を受けて、ウトナイ湖周辺から日本海側ではマガンの飛来は例年に比べ1、2週間早く、マガンの初認はウトナイ湖では2月21日(ウトナイ湖サンクチュアリ「最新自然情報」)、宮島沼では3月1日、サロベツ原野では3月28日となった。宮島沼が完全に解氷する「沼開け」は、例年より10日早い4月4日となり、それ以降5万羽を超すマガンで連日賑うことになった。一方、十勝川下流域

では春先のドカ雪のため雪解けが遅れ、例年ならマガンで賑わう時期にマガンが採食場所を探して右往左往する光景が見られ、3月8日には釧路湿原上空でもマガンが観察されている(音成邦仁氏 私信、本藤泰朗氏 私信)。

マガンの最大飛来数は、ウトナイ湖では3月8日の61,000羽となり(ウトナイ湖サンクチュアリ「最新自然情報」)、ここ数年観測されていた10万羽には届かなかった。今年は雪解けが早く、千歳川流域遊水地群などが早くから利用できるようになったため、ウトナイ湖に集結せずに分散してしまったと考えられる。千歳川流域遊水地群の利用状況を調べることも今回の調査の重要なテーマであったが、調査日が合わず十分に確認することができなかった。宮島沼では4月21日に過去最高となる79,980羽を数えたが、マガンは融雪期に石狩川中流域以北に広く分散し、全体的な消雪とともに宮島沼に集結するので、今年はその傾向が顕著に現れたものと考えられる。

宮島沼では4月23日から渡りが始まり、渡去も早い傾向となった。十勝の生花苗沼では、4月20日の週からマガンがぱったり少なくなったとの報告があり(磯野満里子氏 私信)、その頃から渡りが始まっていたと思われる。また、十勝川下流域から飛び立ったと考えられる渡りの群れが、4月25日に釧路湿原(黒沢信道・黒沢優子氏 私信)と白糠町中茶路(吉野智生氏 私信)で、5月1日にも釧



過去最高となる約8万羽のマガンがねぐら入りした宮島沼。ドローン等によるカウント手法の開発を計画している。

路湿原(本藤泰朗氏 私信)で観察されている。釧路湿原ではマガンの群れが観察されるのは希とのことで、さらなる分布変化の兆しの可能性もあり、今後も注目したい。

まとめと展望

多くの方々の協力で実現できた合同調査だったが、北海道を通過するマガンの数と分布の概要を把握することができ、非常に有意義な結果となった。今回初めて渡り初期のウトナイ湖だけでなく、渡り後期に各地に分散しているマガンの総数が10万羽以上いることを確認できたが、当初考えていたように各地のピークに合わせた調査はできず、渡り時期の合同調査の難しさを改めて実感した。しかし、今後も道内のマガンの数と分布は変化していく可能性が高く、国内越冬数との比較もまだ不十分であるため、継続的に合同調査を実施できればと考えている。

合同調査の日程については、その年の状況にあわせるのは難しく、ある程度固定する必要があると、3月最終土曜日と4月最終土曜日に実施できればと考えている。しかし、十勝川下流域では渡りが4月20日前後から始まることもあり、4月は第3週の週末に実施することも視野に入れて再度検討したい。秋の渡りについても、10月第1、第3土曜日に調査を企画したいと考えている。引き続きご理解、ご協力をいただけるようお願い申し上げる。

調査実施上の問題点として、十勝川下流域やサロベツ原野ではねぐら調査が困難で、多くの労力をかけて採食地を見回らなければいけないことがある。今後は各地のモニタリングの簡易化に向けて、ドローンや固定カメラによる調査手法の開発を検討している。

また、現在はマガンに的を絞っているが、ガンカモ類全般、あるいは農地・草原性鳥類全般についても広域的なモニタリングの必要性を感じており、将来的にはそれらも含めた市民参加型調査に発展できればと考えている。

参考文献

- 池内俊雄(1996) マガン. 文一総合出版
牛山克巳 編(2012) みんなでマガンを数える会 25周年記念誌. 宮島沼の会
宮林泰彦 編(1994) ガン類渡来地目録第一版. 雁を保護する会

表紙の鳥

アカガシラサギ

(カラー写真は<http://www.aigokai.org>に掲載)

6月にアカガシラサギに出会うことが出来ました。風切が以前見た記憶よりもすごく白く、こんなにも綺麗だったのかと感動しました。久しぶりの出会いでしっかりと観察することができ貴重な体験となりました。

鹿川 美咲(江別市)



ウトナイ湖のガン類

公益財団法人日本野鳥の会 保全プロジェクト推進室

ウトナイ湖サンクチュアリ チーフレンジャー 中村 聡

ウトナイ湖の概要

ウトナイ湖は苫小牧市東部に位置する、面積275ha、周囲9km、平均水深0.6mの淡水湖である。多くの渡り鳥の重要な生息地であるため、1981年に日本野鳥の会が周辺を含めた510haを日本で第1号の「サンクチュアリ」とした。その翌年に同域が国指定鳥獣保護区（特別保護地区）となり、1991年には日本で4番目のラムサール条約湿地に登録されている。

ウトナイ湖のガン・カモ類とハクチョウ類

ウトナイ湖では今までにサギ科、カモメ科など16科122種の水鳥が記録されており、これは全確認種の約45%を占める。カモ科に属するのは36種で、このうちガン類は8種（シジュウカラガン、コクガン、ハイイログアン、マガン、カリガネ、ヒシクイ、ハクガン、サカツラガン）の記録がある。

1年のうちで水鳥の種数と個体数がともに多くなるのは、越冬地の本州以南へ向かう途中に立ち寄る10～11月、および繁殖地のロシアなどへ渡る途中の3～4月である。ほぼ結氷してしまう湖で冬を越すのはオオハクチョウ、オナガガモ、マガモ、ホオジロガモ、ミコアイサなどわずかで、また、夏に繁殖するのもマガモとカルガモしかない。

ガン類の秋の渡り

ロシアでの繁殖を終えたヒシクイとマガンがウトナイ湖で初確認されるのは、9月中旬～下旬。2014年はそれぞれ9月11日、9月21日であった。ヒシクイの方が早く記録される傾向にあり、亜種オオヒシクイも渡来する。また、過去には小型のヒシクイ（亜種名は不明）が確認されたこともある。例年は初認から約1ヶ月後に数のピークを迎えるが、昨秋はマガンが10月23日の3,480羽前後、ヒシクイは10月9日の734羽以上が最高羽数となった。

秋のガンたちは、採食や羽を休める場所として湖を利用する。春とは異なり、どうやらねぐらは別の場所にあるようだ。ウトナイ湖には午前9時～10時頃に飛来した後、南西部の浅瀬で休み、午後3時頃になると湖の中央部から飛び去ることが多い。日中は湖でじっくりと観察することができるため、シジュウカラガンやサカツラガンなど比較的珍しいガン類を群れの中に探すのも、また、調査のためカウントするのも、春に比べて容易となる。2014年の秋はハクガンと、なぜかコクガンがそれぞれ1羽ずつマガンの群れに混じり、12月上旬まで滞在した。標識個体も毎年のよ



秋のウトナイ湖。ガンたちは水草を食べ羽を休める。

うに記録されるが、こちらもやはり秋の発見が多く、2011年11月30日には青色の首環（C49／装着地はロシア）を付けたマガンを確認している。

ガンたちは湖とねぐらとを行き来して1日を過ごしながらか、しばらく当地に滞在するが、例年だと、湖が結氷する12月に本州または道南地方の一部へと渡去し、姿が見られなくなる。

ガン類の春の渡り

宮城県などで越冬したガンたちが秋田県を經由し、再びウトナイ湖を訪れるのは、例年、湖の氷がとけ始める3月に入ってから。2015年は初認が（開氷も）早く、マガンが2月21日、ヒシクイが2月22日であった。秋と比べて春は数が桁違いに多く、2014年3月29日には過去最多の107,000羽以上を記録し、初の10万羽超えとなった。特にマガンは近年、全国的にも数が増加しており、当地でも同様の傾向が見られる（図1）。いつもの年だと、渡りのピークは3月下旬で、その後、4月中旬の終認まで続く。

春は秋と異なり、ウトナイ湖をねぐらとして利用するため、日中に湖で姿を見ることは少ない。観察には周辺の田畑へ向けて採食に出かける早朝、湖に戻って来る夕暮れ時がおススメだ。赤く染まる空に多くのガンたちが飛ぶ、壮大な光景を見ることができる。

ネイチャーセンターでは、ガンたちの渡来にあわせ、毎年定期的に個体数調査を行う。湖から採食場へ向かう早朝（おおよそ4時30分～7時30分）に、レンジャーとボランティア数名で、まずは湖面に休んでいるところを数える。秋はマガンとヒシクイを識別し、種ごとに数えることも可能だが、春はまだ薄暗く数も多いことから、両種の区別はかなり難しく、ガン類としての総数となる。そして、飛び

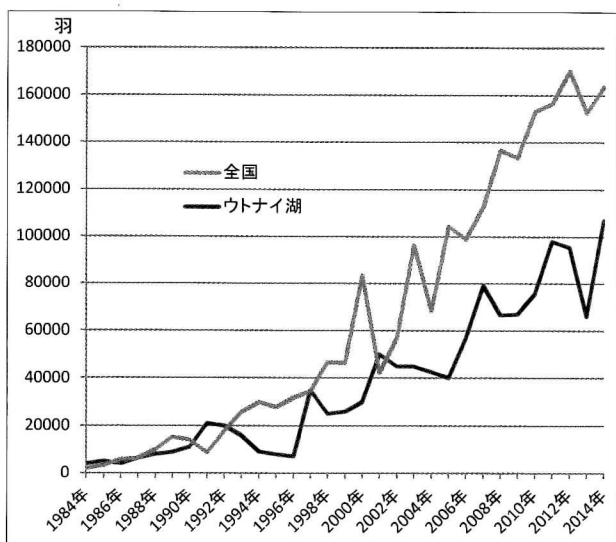


図1. ガン類の個体数の年変化 (1984年～2014年/個体数)

注) 全国のデータは「マガン」。環境省のガンカモ類生息調査(1月)の結果。http://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html) によるもの。ウトナイ湖のデータは「ガン類」。サンクチュアリの定期カウント調査(3月)によるもの。

立ちが始まると、どの方面に、何羽ぐらい向かったのかを記録していく。飛んで行く先は、渡りの初期はむかわ・厚真方面、中盤から後期は千歳方面へと変わる。採食場となる田畑の、雪どけ状況が日を迫うごとに変化するためだろう。ちなみに調査結果は速報として、ウトナイ湖サンクチュアリHP内のブログでも紹介している。参照いただきたい。



あかつきの空に飛び立つガン類 (大半はマガン)。周辺の田畑へ採食に向かう。

2015年春の渡り

ウトナイ湖における春季のマガンの初認日は、2011年から2014年まで、順に2月22日、3月2日、3月8日、3月2日。ヒシクイは同じく3月7日、3月10日、3月15日、3月16日である。前項で紹介したとおり、今春はマガンが2月21日、ヒシクイが翌22日で、過去5年間で最も早い記録となった。また、確認された羽数は3月8日の61,000羽

以上が最高で、予期していた10万羽以上にはならなかった。

この春は、宮島沼水鳥・湿地センターの牛山克巳さんの呼びかけにより、北海道内の各所で合同調査が行なわれた。当サンクチュアリのレンジャーも参加したが、思いのほかガンたちの北上が早く、第1回調査の3月27日にはすでに渡りの大半は終了しており、ウトナイ湖で確認されたのは10,600羽前後と少なかった。また、第2回目の4月25日は姿を全く確認できなかった。

気象庁発表の、苫小牧地方における気象データを見ると、2015年3月の日平均気温は+2.4℃、降雪量の合計は34cmであった。こちらも2011年から2014年は、それぞれ順に0℃、-0.5℃、-0.2℃、-0.2℃、11cm、56cm、54cm、49cmであり、今春は暖かく、雪が少なかったことがわかる。これらの気象条件が、北上する時期を早め、ねぐらや採食場所を分散させるなど、ガンたちの渡りに影響したのではないかと考えられる。

一方で、新たな発見もあった。この春はウトナイ湖だけではなく、周辺に広がる勇払原野の弁天沼でも調査を行い、3月19日に32,000羽以上を確認したのだ。これは、弁天沼がウトナイ湖と同様、ガン類の渡りにおける重要な中継地であることを意味する。同地域は、当サンクチュアリが鳥獣保護区の指定(さらにその先)を目指して保全活動を進めており、重要性を裏付ける貴重な結果となった。

雁ウォッチングイベント

数万羽のガン類が渡来する春は、ウトナイ湖の最もダイナミックな自然を感じることができる時期だ。そこで、湖がガン類の渡り中継地として重要であることや保全の必要性を伝えるため、ネイチャーセンターでは毎年3月に、観察会や特別展示などさまざまな企画を行う。

今春も3月下旬に、ねぐらからの飛び立ちを観察する「あかつきに雁を見る会」を日本野鳥の会苫小牧支部と共催し、ねぐら入りを観察する「たそがれに雁を見る会」を単独で開催した。観察会の開催日は年度当初に決定するため、その日がうまく渡りのピークにあたるかどうか、毎年、直前まで気を揉む。今年は渡り時期が早まったことで、「あかつきに雁・・・」は予定日の1週間前に、急遽、もう1回追加で開催したが、両日とも観察した羽数は思ったほどではなく、しかも、渡りが早くて数は少ないことが新聞等で大きく取り上げられたため、参加者も期待するほど集まらず、やや拍子抜けしたイベントとなった。主催者としては、壮大な光景を皆さんに見ていただきたいと願うが、なかなかうまくいかないものである。

野外だけでなく、ネイチャーセンター内でもガンたちの魅力を伝えようと、今春は「雁のいろいろアート展」を開催した。これまで6年続けた「雁のいる風景」写真展の企画を広げたものだ。公募により、ステンドグラスや絵画、俳句、ぬいぐるみなどの作品が集まり、4月までの2ヶ月間、展示を行った。

マガンの越冬

前述のとおり、秋のガンたちは例年だと湖が結氷する12月には飛去してしまうが、2009年は12月27日にマガン70羽前後が、翌2010年1月3日にも15羽前後が観察された。冬を越したかに思えたが、その後に積雪があり姿を消してしまった。

マガンは近年、新ひだか町静内や伊達市などで越冬しており、ウトナイ湖でも2006年～2007年のシーズンに冬を越したことが確認されている。近い将来は毎冬、記録されるようになるかも知れない。雪が少なく採食できること、ねぐらとする場所が凍らないことなどが越冬条件のようだが、どうだろうか。個体数の増加や越冬地の拡大は地球温暖化の影響とも考えられ、ガンたちの今後の動向に注目したい。

今後の調査テーマ

国内有数の渡り中継地として、ウトナイ湖に立ち寄るガンたちへの興味は尽きない。明らかにしたい今後のテーマは、秋のねぐらはどこにあるか、春は日中に何処まで採食

に出かけるのか、既知以外に渡りのルートはあるか、ウトナイ湖でも毎年越冬するのか、どれくらいの割合がウトナイ湖の次に宮島沼を訪れるのか、などなど。特に、個体数の増加に関しては、特定の越冬地への一極集中による感染症のリスク上昇、採食場である田畑での農作物の食害なども懸念され、周辺の越冬地は拡大するかといったことも含め、注目していきたい。今春に行われた合同調査の輪が広がり、市民が渡りシーズンに空を見上げる、どこの田んぼで採食しているか情報が寄せられる、などにつながればと期待している。

参考文献

- 日本鳥学会(2012) 日本鳥類目録 改訂第7版
- 日本野鳥の会(2006) ウトナイ湖・勇払原野保全構想報告書
- 牛山克巳 編(2012) みんなでマガンを数える会 25周年記念誌 宮島沼の会
- 日本野鳥の会(2014) ウトナイ湖サンクチュアリ2013年度活動報告

十勝川下流域のガン類

NPO法人日本野鳥の会十勝支部 副支部長 千 嶋 淳

十勝川下流域とは？

十勝岳付近に源を発する十勝川は多くの支流を集めながら十勝平野を流れ下る。猿別川合流点付近からは川幅が広く、流れも緩やかな下流域の様相を呈し、周辺には沼や湿地が広がる。河口までの30km余りでは十勝で記録のある野鳥の8割に当たる280種以上が記録され、タンチョウやオジロワシなど希少種も多い。国内有数のガン類中継地であり、バードライフ・インターナショナルなどの選定する重要野鳥生息地(IBA)の一つでもある。

こう書くと、さぞかし自然豊かな地域と思われるかもしれないが、話はそう単純でない。かつて蛇行を繰り返した十勝川の河道は、巨大な沼(キモントー)とそれに付随する湿原の中に掘られた直線的な水路(統内新水路)へ切り替えられ、周囲は灌漑や埋め立てにより農地化された。重要な食糧生産地となった反面、大正から昭和の僅か60年で湿地の8割以上が失われた。現在の湿地は河跡湖や農地に点在する小さな沼で、鳥たちはそれらと共に農地も利用するため、タンチョウ、ガン類、オオハクチョウによる農業被害が発生している。

この地域では浦幌野鳥倶楽部や日本野鳥の会十勝支部が観察を継続して来たが、ガン類の渡来数やその動向は十分に解明されていない。河川、湖沼に分散してねぐらを取り、ねぐら出入り時の一斉カウントが難しいためだ。日中、農耕地の採食個体を数えるのだが範囲が広大で、調査

に携わる人員も多くないことがネックとなっている。

長年の「常連」～ヒシクイ

ピーク時には5,000羽以上が飛来する。大部分が亜種オオヒシクイで、亜種ヒシクイは少ない。この2亜種は最近、海外では別種とされる趨勢にあり、今後はより正確な識別が必要だ。

9月上旬、乾いた風が秋を感じさせるものの、まだ青々とした牧草に最初の群れが降り立つ。数は日ごとに増え、昼間は浦幌町三日月沼などの湖沼と周辺の農地を行き来する。この時期は水草もよく食べ、沼から飛び出したのを撮影したら腹にヒシの実が付いていたという、冗談のような本当の話もある。収穫が進めばデントコーンやビートの畑も利用し、ジャガイモ畑で収穫前の芋を掘り返すという、ちょっとした悪事も働く。10月中・下旬がピークで、11月に入り沼に薄氷が張り出すと続々南下する。月末までに概ね渡去するが、温暖な年には12月上旬まで滞在する。夜は浦幌十勝川や十勝川に分散してねぐらを取る。

春は2月に少数の斥候が飛来する年もあるが、大抵は3月上旬からだ。水域や畑はまだ雪水に閉ざされ、酪農家の堆肥場やサイレージに群れが集中することも。3月末から4月初めがピークで、原野から雪が消え、ヒバリの朗らかな囀りが響く4月下旬までにはほぼ渡去する。

首環標識や発信機による追跡調査から、十勝の亜種オオ



解氷の進む沼に集まる亜種オオヒシクイやオオハクチョウ

ヒシクイはカムチャツカで繁殖や換羽を行い、一部は道北のサロベツ原野を經由して到達し、その後、新潟県や石川県まで渡ることが知られている。正確な飛来数は把握できていないが、1990年代と比べて大きな増減はない。

亜種ヒメヒシクイと思われる2羽が1980年代後半に中流域の音更町で観察・撮影されている。

20年で増加～マガン

1980年代まで十勝のマガン渡来地は主に大樹町生花苗沼だった。十勝川下流域への飛来数は数百羽程度だったと思われる。しかし、1990年代半ばより特に春に増え始め、2001年には約4,000羽、2013年4月には10,524羽が数えられた。見落としなどを考慮すると現在、春には1万羽をかなり上回る数が飛来すると考えられる。一方、秋はそう多くなく、5,000羽かそれ以下だ。春と秋で渡りルートか中継地での滞在時間が異なるのかもしれない。

秋は9月中旬に飛来する。南下は早く、11月中旬には見られない年もある。春は雪解けの早い年で2月末、通常は3月上旬から渡来し、遅い群れは5月上旬まで滞在する。日中は水域での休息と農耕地での採餌を繰り返し、牧草地、小麦畑などヒシクイより乾燥した畑に分布する。小麦畑では秋の播種後に発芽し、雪の下で冬を越す新芽を採食するため、被害が顕在化しやすい。農家は爆音機などの対策を取っているが、すぐに慣れてしまう。ねぐらは浦幌十勝川などへ分散する一方、豊頃町幌岡大沼では集団でのねぐら入りも観察される。

昔からの渡来地である生花苗沼では1990年代末の春に少なくとも3,000羽が確認されたが、近年の情報は無い。広尾町、旧忠類村などからの記録も目立ち始め、飛来数は増えているようだ。

奇跡の復活～ハクガンとシジュウカラガン

ハクガンは明治初期まで東京湾に群れが飛来したらしい。しかし、狩猟による乱獲に加え、繁殖地の北極海沿岸へ放牧されたトナカイによる巣の踏み付けのため、アジアへ渡る群れは消滅した。1969年から1991年までの23年で北

海道では12羽の記録しかなく、十勝では1991年3月の1羽が初記録である。

1993年、北極海に浮かぶウランゲリ島の繁殖地から、アジアへ渡るアナデイル低地のマガンの巣へ卵を移して里親とするプロジェクトが日露米の国際協力で実施された。1994年秋以降、1～数羽が毎シーズン十勝川下流域へ渡来するようになり、2007年秋には25羽と初めて2桁を超えた。2014年秋、127羽に達した飛来数は順調に増加している。2014年秋には青色型（アオハクガン）も1羽渡来した。



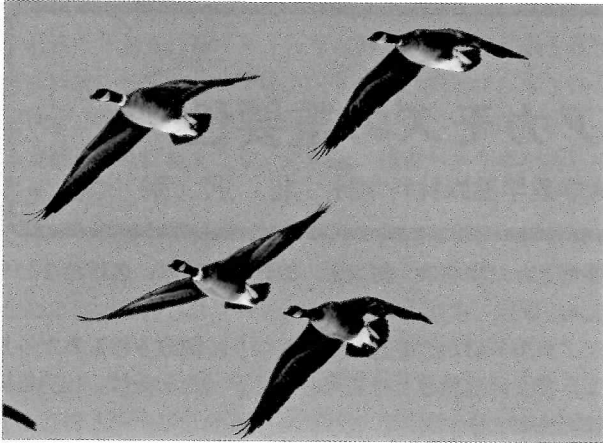
雪原の上で出会ったハクガンとタンチョウ

秋は9月末か10月上旬に渡来し、11月下旬まで滞在する。十勝を飛び立った後は秋田県八郎潟を経て、新潟県朝日池まで渡る。春は3月中旬から4月下旬まで見られる。

当初は他のガン類（主にヒシクイ）の群中に見られたが、2桁を超えると同種だけの群れを作り、3桁になった頃からは複数の家族から成る群れに分かれて行動している。そうなると数を把握するのが大変で、現在最も確実とされる方法は群れの飛び立ちを撮影し、パソコン画面か写真で数えることだ。ハクガンの渡来を地元のウォッチャーは心待ちにされていて、9月には「そろそろかねエ」、「今年は何羽かなア」が挨拶代わりとなる。

江戸時代には、仙台周辺で獲られるガン類の10羽中7、8羽が「いぬがん」の名で呼ばれたシジュウカラガンだったという。狩猟、繁殖地の千島列島に放たれたキツネによる捕食のため、戦後は数羽が渡来するまで激減した。十勝川下流域では1993年4月の初記録以降、2000年代にはほぼ毎シーズン、数羽が渡来するようになった。飛来数は更に増え、2015年春は約900羽が観察された。これらは八木山動物園、日本雁を保護する会などによる保護増殖事業の成果である国内飛来数増加と同期している。

秋は主に10月中旬以降にやって来る。水域の結氷や降雪に伴って南下した後、春は3月中旬に帰って来る。ただし、雪が多いと日高地方などへ戻る。採餌環境はマガンと似て、小麦畑、牧草地など乾いた農耕地を好む。数が少ない頃はマガン群中に見られたが、近年は同種だけで行動する傾向にある。体が小さいせい、飛翔時には他のガン類



舞い降りるシジュウカラガン

より密集し、遠目にはカモ類のように見える。激増した最近では正確なカウントが困難になって来た。

亜種ヒメシジュウカラガンと思われる、明らかに小型で白い首環を欠く個体が時々観察される。ただ、秋には体型はシジュウカラガンなのに白い首環のない個体（おそらく幼鳥）もいて、識別には注意したい。

おわりに

上記4種以外はずっと少ない。カリガネは数~10羽前後がマガンと一緒に渡来する。小さいが気は強く、自分より大きなマガンを威嚇するのをよく目にする。サカツラガンは単独でヒシクイ群中に見られることがあるが、以前より

頻度は減っている。コクガンは稀に牧草地でマガンと共に観察される。十勝南部の岩礁海岸で少数越冬するものの、詳しい数や生態は不明だ。それ以外の十勝のガン類としては1984年5月に帯広市でインドガンの記録があるが、動物園から逸脱した可能性が高く、エジプトガンも同時に観察されている。

十勝へのガン類の飛来ルートは十分わかっていない。海岸線以外に十勝川中流や利別川沿いを飛ぶ群れも多く、前者は北海道中央部、後者はオホーツク海沿岸へ繋がると推察される。

現地での観察に当たっての注意事項をいくつか。ガン類は警戒心が非常に強く、渡りのエネルギー補給に勤しむ鳥を不用意に飛び立たせないためにも車やブラインドから観察し、首を上げて警戒し始めたらそれ以上は接近しないよう心がけたい。農地には絶対立ち入らないようにしよう。作物の畑に入る人はほとんどいないが、牧草地への立ち入りは後を絶たない。牧草地も立派な畑かつ私有地で、人が入ることで作物や家畜の病気を媒介するリスクがある。沼や農耕地周辺の道路から観察することになるが、交通量が多く、農作業も盛んなのでハザードを付けるなど交通事故を起こさない、また農作業の邪魔にならないための配慮が必要だ。地域の財産であるガン類の観察をいつまでも楽しめるよう、協力をお願いします。

最後に、普段からガン類を見守っている久保清司事務局長をはじめ浦幌野鳥倶楽部のメンバーに多くを御教示いただいていることを記して、謝意を表したい。

野幌森林公園でブッポウソウ

札幌市清田区 坂本 由美子

5月に緑が濃くなってきた野幌森林公園の大沢・四季美・志文別線・エゾユズリハコースを散策しましたが、エゾリスとの出会い、オオアカゲラの懸命な給餌、クマゲラのつがいに会った後、木々の間の青空を見上げると枯れ木の枝に大きな鳥が留まりました。夕日に向かって留まっている姿は、嘴と足が赤く、羽は青色に輝いており、一度も見たことがない鳥でした。急いでシャッターを押しましたが、下からの角度でしか撮影できなかったことが残念でした。画像を確認していると、今度は、コース上に視線をこちらに向けてじっとしているエゾユキウサギと眼が合いましたが、真っ白な長い後ろ足で、これぞウサギ跳びといった感じで逃げて行ってしまいました。鳥の名前が判らないため、「自然ふれあい交流館」へ教示をお願いしたところ、後日、担当者の方から「野幌森林公園では、初

確認のブッポウソウでした」との連絡がありました。自然の中で鳥や小動物と出会える瞬間は、いつも奇跡に近いものと感じていますが、この日は、多くの貴重な体験をしたことに感謝する一日になりました。



2015.5.21

江別市道立自然公園野幌森林公園 志文別線

シルバ通信⑦

道央地方に分布するアカモズの重要性

北海道大学農学部森林科学科 北 沢 宗 大

アカモズはどのような環境に生息しているのか。この疑問は私が幼い頃から抱いていた疑問です。先崎理之さん（北海道大学農学院）の勧めもあり、道央地方などに生息するアカモズの個体数調査を実施する機会を得て、繁殖地などを数多く調査することができました。今回は道内に生息するアカモズについて紹介させて頂けたらと思います。

日本鳥類目録第7版（日本鳥学会 2012）では国内で記録がある亜種として亜種アカモズと亜種シマアカモズの2亜種が認められています。このうち亜種アカモズが夏鳥として北海道、本州の一部地域、サハリン南部に渡来します。環境省のレッドリストでは絶滅危惧IBに指定されているなど絶滅の危険性が高い種です。アカモズの直近の生息個体数や分布傾向について調査した文献はなく、道内の生息動向を探ることは喫緊の課題であると考えました。

調査は2014年及び2015年の繁殖期に実施しました。2014年は道央地方において出現個体数と出現位置を記録しました。2015年は十勝川流域と道北地方において同様の調査方法で行いました。

調査における発見個体数を図1に示しました。希少種であるため、市町村単位で集計しています。2014年度の調査では43つがい91個体を、2015年度の調査では2つがい5個体を発見することができました。なお、調査中には幼鳥も観察されましたが、発見個体数には含めていません。個体数に着目すると、道央地方では、苫小牧市周辺及び札幌市周辺にて数多くを観察しました。岩見沢市周辺においても少数ですが生息を確認できました。道北地方では調査範囲は限られましたが、名寄市周辺やサロベツ原野にて生息を確認できました。十勝川周辺では確認できませんでした。

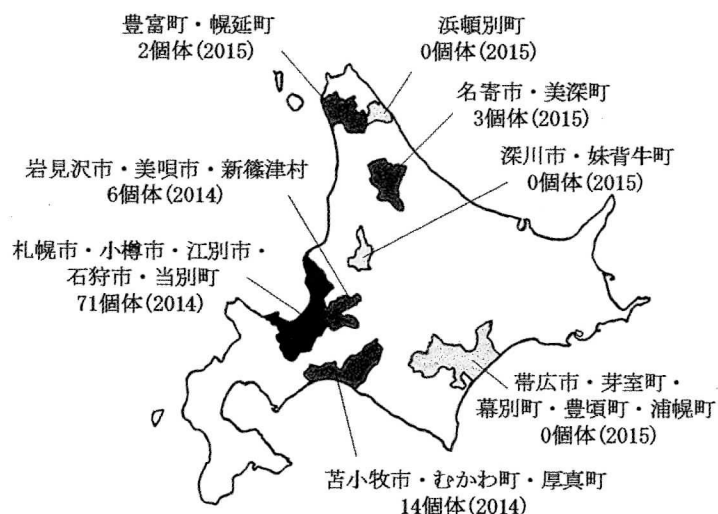


図1. アカモズ調査地域と発見個体数

観察された環境は、河川敷、放棄地、草原、農耕地などでした。

アカモズはかつて道内ではふつうに観察される鳥だったようです。文献などは省略しますが、たとえば、1959年には北海道大学の構内で3つがい繁殖していたとのことです。ウトナイ湖サンクチュアリセンター前で繁殖とか、斜里郡小清水町で多数が繁殖という記録もあります。でも、いずれも現在は確認されていません。

減少傾向が報告されるようになったのは1980年代からのようです。全国鳥類繁殖分布調査では、国内で1970年代に生息が確認された地点のうち、1990年代ではその8割の地域で確認されなくなりました。調査された多くの鳥種のうちこの20年における生息確認地の減少率では、アカモズはウズラ、チゴモズに次いで3位であり、ほかの鳥と比較しても急速に分布域を縮小しています。このような急激な減少傾向は北海道内でも同様です。環境省が2002-2003年に行った追跡調査では、1974-1985年で生息が確認された地点のうち86%で確認されませんでした。減少原因については越冬地の環境改変、繁殖環境の喪失が指摘されていますが、まだまだ謎が多く、解明が急がれます。

繁殖地がサハリンを除くとほぼ国内に限られる事を鑑みると、特に個体数が集中している道央の個体群とその生息地は彼らの存続を左右する非常に重要な存在であると考えられます。また、道北に残存する繁殖地及び繁殖個体も多様性の観点から非常に重要です。このようにその保全が急がれるアカモズですが、減少原因等が明らかでない以上、具体的な保全策を打ち出すことは困難です。

我々にできる最も簡単な「アカモズへの配慮」は、観察圧や撮影圧をかけないことです。むやみに彼らの生活圏に立ち入ることなどはやめましょう。6月以降は鳴くことは少なくなりますが、人間が生活圏に近づきすぎると警戒声を発します。その際はなるべく早くその場から立ち去るようにしましょう。また、餌をくわえたまま人間の近くをうろうろすることもありますが、これは人間を警戒し難に給餌が出来ていない状態が続いているので、なるべく早めに観察を切り上げましょう。10年後も20年後もずっとアカモズが北海道に渡来してくれるように、我々バードウォッチャーも日々の観察や撮影態度を改めることは非常に重要です。

最後になりましたが、アカモズの繁殖情報などがありましたら北沢 (goldcrestxmunebirds@yahoo.co.jp) までご連絡頂けると幸いです。

鳥の名前の話 一最終回一

森林総合研究所北海道支所 川 路 則 友

亜種とはどういう考え方？

先に、生物の基本単位は「種」と書きました。ただし、種は不変のものではなく、時代とともに変化していくものです。それが生物の進化です。しかし我々の生きている時代、もっと広げて人類の誕生以来の時間的スケールくらいでは、なかなか鳥類の進化というのは見られないものです。もっと長い時間をかけて鳥類は徐々に変化していつて、もしくはどこかで起こった急激な環境変化で一気に変化してきたと思われます。したがって「種」として分類されているものが、いずれさらに別のいくつかの種に分かれる可能性があるわけです。その原因にはいくつか考えられます。まず、一つの集団の中に、突然変異により別の個体とは若干異なったものが生まれ、その後に起きた環境変化にその個体（個体群）だけが適応でき、生き残れた、という場合もあるでしょう。また、広い地域に連続して分布していた生物が何らかの原因でいくつかの集団に分断され、その状態が長い間続くと、それぞれが生息地の環境に適応して少しずつ別の形態に変わっていくことが考えられます。その後、ふたたび分断がなくなって一緒になったとしても、すでに2つの集団どうしでは繁殖できないほど異なった状況（形態）になって、別種として認識されるということもあります。

この後者のような場合、その中途段階でいまは羽色や翼の長さが少し異なる程度といった差をもつもののどうしを、別種とまでは思わないまでも、その予備段階と解釈して、「亜種」という立場で分けることがあります。日本の鳥でいうと、ヒヨドリやヤマガラなどは、住んでいる島によって多くの亜種に分けられています。島という環境は、個体群が分断され、隔離されやすい要因になります。北海道も大陸から考えてみると小さな「島」ですが、どちらかという、本州以南のほうが隔離された歴史が古いことから、北海道の固有亜種よりも本州以南での固有亜種のほうが圧倒的に多いわけです。ただ、すべての鳥類に亜種がありえるかというところではなく、中には、亜種といえるほどの変異が認められないものも多いので、そういう種には亜種はありません。これは単型種といい、いくつかの亜種をもつ多型種と区別しています。

亜種名の付け方と「基亜種（きあしゅ）」の意味

学名で触れたように、コシジロヤマドリはいまヤマドリの一亜種になっているものの、最初は独立した「種」として記載されたと言いましたが、そのような例は数多くあります。その場合、まとめられた「種」として最初

に付けられていた種小名は「基亜種（きあしゅ）」として亜種名にも適用されます。ヤマドリの場合、種小名は「*soemmerringii*」（ゾーメリンギイ）（ゾーメリング氏の、という意味）ですが、これはシーボルトが、北部九州で採集したヤマドリ標本を送ったものに対して、テミンクが1830年に命名したものです。前述のコシジロヤマドリはドレッサーが1902年に命名していますので、ヤマドリとしてはより早く命名したテミンクの名前を種小名にすることになったわけです（国際動物命名規約）。したがって、アカヤマドリが基亜種とされ、学名の表記方法として、二名法ではなく、亜種名まで明記する三名法を用いて、「*Sylvaticus soemmerringii soemmerringii*」（シルマティクス・ゾーメリンギイ・ゾーメリンギイ）と表されます。いまの日本鳥類目録では、ヤマドリの亜種は「亜種ヤマドリ」（亜種名*scintillans*）（スキンティランクス）、「亜種シコクヤマドリ」（*intermedius*）（インテルメディウス）、「亜種ウスアカヤマドリ」（*subrufus*）（サブブルーフス）、それに前に挙げた「亜種アカヤマドリ」と「亜種コシジロヤマドリ」の合わせて5つになっています。そこで、なぜ和名として亜種ヤマドリとなっているものが、基亜種になっていないのでしょうか？ 実は、亜種ヤマドリ（*scintillans* スキンティランクス）を最初に独立した種として記載したのはイギリスのグールドという鳥類学者で、アカヤマドリが最初にヤマドリとして記載されてから30年以上遅れた1866年のことです。もちろんスキンティランクスも、グールドが当初は別種の種小名として発表していたのですが、のちの研究者がヤマドリの亜種として含め、亜種名になったのです。「亜種ヤマドリ」（スキンティランクス）のタイプ標本は、どうも横浜周辺で採集されたものらしいということがわかっています。普通に考えると、亜種ヤマドリが基亜種で、アカヤマドリ、コシジロヤマドリなどはそれから派生した別の亜種と考えがちですが、ここに学名と和名の混同が生じます。

通常、亜種名というのは基本的な鳥の名前の前に形態的特徴や地域名などの接頭語を付けます。シマエナガ（エナガの亜種）、リュウキュウキビタキ（キビタキの亜種）、シロハラゴジュウカラ（ゴジュウカラの亜種）という具合です。日本鳥類目録では、日本人がわかりやすいように、種や亜種の和名の付け方を規定しています。それによると、日本で繁殖する亜種をその種の和名にする、もし2つの亜種以上が日本で繁殖したり越冬したりする場合、本州で繁殖する亜種を種の和名にし、日本で越冬するだけの鳥の亜種の場合はもっとも普通な亜種に種の和名を付ける

としています。つまり、日本にはエナガとシマエナガが繁殖していますが、本州で繁殖するエナガを種の和名「エナガ」とする、日本で越冬するツグミとハチジョウツグミでは、普通に越冬亜種として見られるツグミを和名の「ツグミ」とする、ということです。ですから、先に書いたヤマドリの場合でも、学名としてはあとに記載されていても本州で繁殖するものを「亜種ヤマドリ」とし、最初に記載された北部九州で繁殖するものは、「亜種アカヤマドリ」としたわけです。これはまったく学名とは無関係です。

日本列島に夏鳥として渡来して繁殖するキビタキの学名は「*Ficedula narcissina narcissina*」(フィケデューラ・ナルキッシーナ・ナルキッシーナ)となっており、まさにこれが基亜種であり、屋久島以南で留鳥として繁殖するリュウキュウキビタキは亜種名が「*owstoni*」(オーストニー)(オーストン氏の、の意)と付けられているので、たまたま基亜種が和名の呼び方と一致します。ちなみに種小名の *narcissina* (ナルキッシーナ) は、水仙(すいせん)の意味ですが、キビタキの鮮やかな黄色を水仙の花にたとえたのでしょうか?この言葉は絶世の美少年として有名なナルキッソスが水仙に姿を変えたというギリシャ神話に由来しますが、キビタキのオスも、水面に映る自分の姿を見てうっとりしているのかも知れませんね。話を基亜種に戻すと、たとえば、ツグミの基亜種は学名でいうとハチジョウツグミの方ですし、アオジの基亜種もシベリアアオジの方です。またエナガやゴジュウカラといった鳥では、日本には基亜種は生息していないので、シマエナガやシロハラゴジュウカラもどちらも本州のものと同列ということになります。したがってもし、基亜種をその種の基本的な和名にするとしたら、日本の鳥は大半、基亜種ではないので、余計な接頭語が付いた長ったらしくてわかりにくい和名だらけになってしまいます。



僕ってナルシスト?

日本の鳥なのに、なぜ日本人が発見、記載していない? という話

いま記録されている日本産鳥類の学名は、大半が1700年代もしくは1800年代に記載されたものです。近代分類学が確立された当時のヨーロッパでは、冒険航海や植民地政策で支配下に置いた多くの地域を訪れ、その生物を片っ端

から採集して分類し、記載していくという学問の流行があったからです。その時代、すなわち江戸時代、明治初期といった時には、日本でもそのような状況がみられました。先に書いたように、シーボルトやブラキストンなどといった有名な収集家からヨーロッパなどの分類学者に標本が送られ、次々新種として記載されていったのです。当時、日本には残念ながら欧米に匹敵する分類学者が現れなかったばかりか、万国で使えるような生物の記載方法さえおぼつかなかった時代です。明治末期になると、先述の飯島魁氏を筆頭に、次々に著名な鳥類学者が現れ、熱心に研究に取り組みました。そのころ日本でも日本植物学会、日本動物学会、日本鳥学会といった動植物に関する学会が結成されていきました。当時の日本鳥学会の会報を読むと、例会の席で標本を前にして、分類論議を闘わせていた様子がよくわかります。しかし、時すでにおとし、その時点でほとんどの日本の鳥の分類はひととおり終了してしまっていました。その当時の日本人が新種として記載し、現在まで残っているものとしては著名な鳥類学者である黒田長禮(くろだ・ながみち)氏が1917年に記載したカンムリツグシガモと、1919年に記載したミヤコショウビン、1922年に記載したクロウミツバメくらいでしょう。ただ、ミヤコショウビンについては不完全な標本が1個体残っているだけで、その後の観察例もまったくないこと、標本収集の状況があいまいなこと、別の島にいる種に非常に類似することから、種としての存在を疑問視する声もあります。ちなみに黒田長禮氏は、NHK大河ドラマでも有名になった軍師・黒田官兵衛の末裔で、筑前福岡藩黒田家14代目当主だそうです。

それから1960年代にかけて、種の記載としてはもはや動かしがたい状況ということで、日本列島もしくは周辺地域での鳥類の分布を調べ、これまで記載されたものと少しでも違うと、細かく別の亜種に分けることがブームになり、新たな亜種が続々と発表されたりしていました。ただ、それらも次々統合され、いまでも残っている亜種はわずかになっています。1970年代に入ると、鳥類学の世界にも空前の生態学ブームが起き、分類を再検討するような研究者はほとんどいなくなりました。そんな中、日本で久しぶりに鳥類の新種が発見されたといって話題になったのが、ご存じヤンバルクイナです。この種については、山階鳥類研究所の当時の所長・山階芳麿(やましな・よしまる)氏と所員・眞野徹(まの・とおる)氏の共著で、しかも「山階鳥類研究所研究報告」という学術雑誌に原記載論文を掲載しています。別に私は国粹主義者ではありませんが、ここにきてようやく日本人の面目躍如といったところでしょうか。ただ、日本鳥類目録改訂第6版(2000年発行)を作成することになった1990年代には、かろうじて山階鳥類研究所の黒田長久(くろだ・ながひさ)氏と国立科学博物館の森岡弘之(もりおか・ひろゆき)氏という大御所お二人に分類はすべてお任せということになっています。

かく言う私も生態学ブームのまっただ中に学生時代を過

ごしましたので、生態学のおもしろさにとりつかれてしまい、今日までその状態で過ごしてしまっています。しかし、目録改訂第6版発行のころから、日本でも少しずつ分類学や形態学を志す若手研究者が現れ始め、明るい兆しが見えてきています。2012年に出された目録改訂第7版では、それら若手（その時点ではもう若手とは言えない年になっている人もいましたが）の手で、よりしっかり分類の検討がなされたようです。今後、さらに期待できる状況に

なることと思います。

最後は、最近の日本の鳥類学（分類学）への期待で終わってしまいましたが、このように日本の鳥の名前のことについてだけでも、いろいろおもしろいことが多くころがっていますので、皆さんもぜひ興味をもって調べ始めると止められなくなること請け合いです。（おわり）

※ イラスト / 本間 康裕



千 歳 川

2015. 5. 17

千歳市

原口 泰一

皆さん、初めまして。千歳に住む原口といいます。去る5月17日に千歳川で開催された探鳥会に参加させていただきました。

探鳥会なるものに参加するのは生まれて初めてのことで、どんなものかとずっと楽しみにしておりました。以前は自然観察には全く無関心な僕でしたが、5年ほど前に突然登山にハマリ、その後は高山植物、ナキウサギなどの小動物、そして最近では野鳥と興味の対象が少しずつ広がってきました。

鳥見に関しては昨年くらいからちょこちょこ一人でするようになりました。しかしそう簡単に鳥を見つけることが出来るほど甘くはありません。ベテランの方たちはどのように鳥を見ているのだろうか？と思ったのが今回の参加のきっかけです。

こちらの探鳥会は事前申し込みも不要、当日集合場所に行けばいいだけという、急な思い付きでも参加しやすい会です。そして会員でもなければ、知り合いも誰もいない僕でも、アウェイ感を感じることなく楽しく参加させてもらえました。皆さん気さくで親切、終始和やかな雰囲気でした。興味はあるけど踏み出すことに躊躇している方がいらっしゃったら、是非とも積極的に参加されてみることをオススメします！

今回のコースは第一ウサクマイ橋から王子製紙第四発電所ダムまでを往復するコース。途中から川沿いの散策路を歩きます。そこは至る所にミヤマエンレイソウやニリンソウ、シラネアオイ、ミヤマスミレなどが咲き乱れるお花畑でした。身近にこんな素敵な場所があるなんて、長年千歳に住んでいながら知りませんでした。地元といえども、知らないことはまだまだ多いものです。

さて肝心の鳥見の方ですが、これは簡単に言うならばカルチャーショック！でした。エキスパートの方たちと僕とでは探す距離が全く違う！僕は今までせいぜい半径10m程度の範囲でしか探していませんでした。しかし皆さん50mは普通、時には100mもあるかという場所にいる鳥を見ている！これにはビックリです。ハッキリ言って「どうせ

何か分からないや」と捨てていた距離です。当然のことながら、同じコースを歩いても見つける鳥の数は段違い。今回は34種類の野鳥を確認できましたが、自分一人ならせいぜい10種類くらいだったでしょう。

今回初めて見た鳥も何種類もありましたが、中でもカワセミは嬉しかったです。飛んでいる姿をチラッと見ただけですが、とても綺麗な青色をしていました。ヤマセミが止まる木も教えていただいたし、今度は一人でヤマセミを探しに行きたいです。

最後になりますが、このような素敵な会に参加させていただき、主催者や参加されたみなさんに深く感謝申し上げます。おかげでたいへん楽しく、かつ有意義な時間を過ごすことが出来ました。しかも無料で参加できるなんて、北海道野鳥愛護会はなんて太っ腹なのでしょう！休日はもっぱら登山に行くことが多く、毎回は難しいですが、また参加させていただきたいと思いました。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キジバト、アオサギ、ツツドリ、アマツバメ、トビ、カワセミ、ヤマセミ、アカゲラ、ヤマゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、イワツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、エナガ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、ゴジュウカラ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、ニュウナイスズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、アオジ

以上34種

【参加者】伊藤 牧、伊藤俊子、岩佐嘉子、上坂 久・千幸、白田 正、江坂嘉昭、遠藤 整、大朝暁子、小島俊幸、川東保憲・知子、川村宣子、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、佐々木道弘、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、武田規子、田中さちよ、田村修一・裕子、戸津高保・以知子、中正憲佑・弘子、中村 隆、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、原口泰一、樋口孝城・陽子、広木朋子、本間康裕、山崎志津子、山本和昭、吉田慶子

以上41名

【担当幹事】栗林宏三、早坂泰夫

鵒 川 河 口

2015. 5. 24

【記録された鳥】カルガモ、スズガモ、クロガモ、キジバト、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、カッコウ、コチドリ、メダイチドリ、チュウシャクシギ、イソシギ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワ

シ、チュウヒ、オオタカ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ショウドウツバメ、ヒヨドリ、センダイムシクイ、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、ノゴマ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、ドバト
以上40種

【参加者】今堀魁人、上坂 久・千幸、門村徳男、鹿野内裕子、川東保憲、岸谷美恵子、栗林宏三、小林 誠、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、鈴木伸子、高橋貞夫・芳子、高橋良直、谷岡康孝、辻 雅司、中正憲信・弘子、中田勝義、畑 正輔、早坂泰夫・みどり、樋口孝城、本間康裕、丸島道子、村田睦子、山下 茂、山下富雄、吉田鏡子、鷺田善幸

以上36名

【担当幹事】門村徳男、本間康裕

野幌森林公園（夜の探鳥会）

2015. 5. 30

江別市 津山 紗央莉

今回、初めて探鳥会に参加させていただきました。しかも夜の探鳥会なので、声を「聞く」ことがメインであること、聞こえる鳥の種類などを丁寧に教えていただけて出発。キビタキがたくさん鳴いていて、日暮れ前になってもまだ鳴いているのか！と驚きでした。参加者の方々と小さな声でお話をしながらどんどん進んでいるうちに暗くなり、いつの間にかキビタキが鳴き止んでいました。いよいよ夜の鳴き声が聞こえてくるのかなと、いっそう聞き耳をたてて歩きました。しかし聞こえるのはカエルの声で、幹事の方が時々立ち止まるも鳥は鳴いていないようでした。なかなか鳴いてくれないなあと思ったそのとき「ピチッ、ピチッ」という声が聞こえ、ヤマシギだと教えて下さいました。

この時の感動を残し、探鳥会は終了。今回はどうも“ワースト記録”だったらしく、あまり鳴き声を聞くことはできませんでしたが、ヤマシギやアオバズクがいること、もしかしたらヨタカもいるかもしれないというお話や、参加者のみなさんの探鳥記を聞くことができただけで、参加してよかった！と思っています。普段大学のサークル活動として生き物を探しながら野幌森林公園を歩いているので、今回通ったコースもなじみのある道でした。しかし、暗くなってから森に入ることなんてそうそう無いので、全然知らないところに来たような気持ちになりました。終始わくわくして、とても有意義で楽しい時間だったなあと思います。

改めて、幹事、参加者の皆様、貴重な経験と楽しい時間をありがとうございました。

【記録された鳥】ツツドリ、ヤマシギ、キビタキ

以上3種

【参加者】石黒佑紀、大磯久美子、小川由真、栗林宏三、島田芳郎・陽子、宿野部奈那子、杉田範男、津山紗央莉、

寺澤ますみ、戸津高保、畑 正輔、早坂泰夫、本間康裕、松原寛直、山本康裕
以上16名

【担当幹事】戸津高保、畑 正輔

植苗ウトナイ

2015. 5. 31

札幌市北区 田中 陽

現地までは俗にいう「バケツをひっくり返した」の如き豪雨の中、車を走らせる。はたして探鳥会は実施可能か？と思いつつも無事到着。一番到着はやはり総務幹事代表Hさん。ご苦労様です。小雨にはなったが、黒く重い雲はなおも空を覆っていました。

定刻には多くの会員、幹事の皆さんが参集。雨もほとんど落ちてこない状態でいざ出発。出発してすぐに電柱にいつになく高音でドラミングをしているアカゲラを発見、なんと何を思っただろうか電柱の金属板に嘴をハンマーの如く打ち下ろしているではありませんか！「こんなアカゲラ見たことない」「嘴を鍛える練習でもしているのか？」等と皆が口々にしながらも笑顔で観察。

舗装道路をしばらく行くと、センダイムシクイ、カッコウの声が聞こえてきました。森へ入ると鳥の囀りがヤブサメ位ですが、しばらくして少し遠くでキビタキの複雑だが華麗な歌い手のさえずりが聞こえ皆で双眼鏡で探すが見えず。残念。森を過ぎ、開けた草原性鳥たちの出現箇所ではコヨシキリ、カラ類、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、マキノセンニュウ等とオオジシギの飛翔が見えました。低木にベニマシコ、ノビタキのそれぞれの雄雌が見られ女性軍の歓声が上がっていました。また、姿は確認出来なかったのですがノゴマの囀りを聞いた方もいました。

ウトナイ湖が見える所まで来ましたが、猛禽はトビ位でした。ハクチョウも不在。オオヨシキリは湖畔で鳴いてました。観察時間はいつもより短く感じましたが、いつもの場所で最後に鳥合わせを行い終了解散しました。

その後、曇天の黒い雲の行方が気になり、食事持参の皆さんでここで昼食を摂るか否か迷っているとすぐ目の前の低木にベニマシコ、ノビタキ、コヨシキリ、メジロなどが入れ替わりに枝にとまり歓声が上がりました。その後、なぜか暗雲も流れ雨が止み、安堵して腰を下ろし、皆さんで美味しく昼食を摂ることが出来、曇り時々小雨の中でした。なかなか結構な探鳥でした。

帰路森の中でとても綺麗なキビタキを皆さんでじっくり観察できました。カメラ持参の方も「胸の黄色が綺麗！」「こっち向いて！」「かわいい！」「なんだ、お尻しか撮れない！」等と楽しいひと時でした。探鳥会が終了してから鳥がたくさん出た様な会でした。広報幹事代表Sさんが「次回から探鳥会が始まる時点で、これで解散します！」と宣言した方が鳥は出るかも」と冗談交じりに言っていました。同感！

【記録された鳥】キジバト、ツツドリ、カッコウ、オオジシギ、トビ、アカゲラ、モズ、ハシボソガラス、ハシブト

ガラス、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、メジロ、マキノセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、クロツグミ、ノゴマ、ノビタキ、キビタキ、スズメ、カワラヒワ、ベニマシコ、アオジ、オオジュリン 以上28種

【参加者】阿部真美、小野寺まゆみ、島崎康広、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋良直、田中 陽・雅子、谷口勇五郎、田村修一・裕子、戸津高保、中正憲佑・弘子、畑正輔、早坂泰夫、鷺田善幸 以上18名

【担当幹事】田中 陽、鷺田善幸

厚 別 川

2015. 6. 7

札幌市東区 上坂 千幸

集合場所の川下公園に着くと、ヒヨドリが迎えてくれました。

探鳥会が始まり、厚別川沿いの堤防を歩いて行くと、鳥の声が聞こえ、「何か鳴いていますね」と、質問すると、ノビタキだと教えてくださいました。今度は生い茂った草の中や木々の中から「チリチリ、ジュジュ、ギョギョ」と大きな声が聞こえました。探鳥幹事の方が、「コヨシキリとオオヨシキリですね。コヨシキリは移動して見づらい鳥ですが、オオヨシキリも木々の茂みに入るので観察がしにくい鳥ですね」と説明していただきました。

しばらく進んで行くと、また、ノビタキがいました。今度はゆっくり見ることができました。どうやら親子だったらしく幼鳥（雛）も一緒でした。この時期にしては早いようで、5月が暑かったのでノビタキの子育ても早まったのかもしれない話題になりました。

そのすぐそばで、今度はカッコウが電柱に止まりました。その後もカッコウは電線に止まったりしてじっくり見ることができました。「カッコウが人前でこんなに長くいるのはめずらしいですよ」と、探鳥幹事の方が説明していただきました。

参加者の皆様ともいろいろお話することもでき、楽しいひと時を過ごすことができました。

これまで数回探鳥会に参加させていただきましたが、時期や場所によって見られる鳥の種類に違いがあることがわかりました。これからも楽しんでいけたらと思います。

愛護会の皆様、探鳥幹事の皆様、これからも宜しくお願ひ致します。

【記録された鳥】キジバト、アオサギ、カッコウ、トビ、アカゲラ、モズ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、シジュウカラ、ヒバリ、ツバメ、ヒヨドリ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ムクドリ、コムクドリ、ノビタキ、スズメ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ 以上22種

【参加者】秋山洋子、井上公雄、上坂 久・千幸、太田敏枝、大田原勝美、川東保憲・知子、栗林宏三、グロース千鶴子、小林正彦、齊藤由美子・佑朱、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中さちよ、田中康博、戸津高保、中正憲

佑・弘子、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、本間康裕、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、森本玲子、山本康裕、横山加奈子、吉見孝夫・柴乃 以上36名

【担当幹事】品川睦生、原 美保

サロベツ宿泊探鳥会

2015. 6. 13~14

札幌市手稲区 漆崎 修

6月13日~14日に行われた宿泊探鳥会に初めて参加させていただきました。サロベツ湿原へは個人としては行った事がありますが、広い湿原で小さな鳥を見つけるのはとても難しい事もあります。声はすれども姿は見えずと言う具合です。常連さんの、「あそこに居るよ」の方向へカメラを向けると、なるほど居ました。皆様方の観察力には驚きです。おかげ様でツメナガセキレイのような中々見る事の出来ない鳥などを、なんとかカメラで写すことが出来ました。また、木道を歩きながら聞こえてくる声に、ベテランの方々は、「コヨシキリが鳴いている」とか、「マキノセンニュウが鳴いている」とか、色々教えてくださいました。

木道沿いには色々な花が咲いていて、これは何だろうと思ひ調べると、カラフトイソツツジでした。花には詳しくない私ですが、この様にあまり見る事の無い花々が咲いていたり、カキツバタやエゾカンゾウなど、いい色を見せてくれたりしていました。

ちょっと良い天候には恵まれませんでしたでしたが、幹事さん方々のおかげで楽しく有意義な2日間でした。ありがとうございました。



2015年6月14日 サロベツ湿原センター

【記録された鳥】

(6.13) サロベツ湿原（幌延ビジターセンター、サロベツ湿原センター）

キジバト、ツツドリ、カッコウ、オオジシギ、トビ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヒバリ、ウグイス、マキノセンニュウ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ノゴマ、ノビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、ピンズイ、カワラヒワ、ベニマシコ、ホオアカ、シマアオジ、オオジュリン、ツメナガセキレイ 以上26種

(6.14) 豊富温泉周辺、サロベツ湿原(サロベツ湿原センター)、天塩(鏡沼)

カルガモ、キジバト、カワウ、ツツドリ、オオジシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、チュウヒ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、ヒバリ、ウグイス、エゾムシクイ、マキノセンニュウ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ノゴマ、ノビタキ、キビタキ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハクセキレイ、ビンズイ、カワラヒワ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン 以上33種

【参加者】五十嵐加代子、池田亜樹子、石橋和子、大表順



【宮島沼】

2015年10月4日(日)

宮島沼は、ユーラシア大陸の北東地域で繁殖を終えて夏を過ごしたマガンの渡りの中継地として重要な場所です。例年9月下旬から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。マガンのほかにも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類なども見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。時には猛禽類が上空を飛び、水面の鳥たちが一斉にざわめくのも見ものの一つです。湖畔から沼を見るだけで移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせを行い、自由解散となります。天気が良ければ駐車場横で昼食をとることもできます。

集 合：10:00

交 通：中央バス 岩見沢ターミナル発(月形行)

または月形駅発(岩見沢行)

「大富農協前」下車 徒歩10分

【野幌森林公園】

2015年10月11日(日)、11月1日(日)、12月6日(日) 初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しめます。夏鳥はほとんど去り、カラ類やキツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。大沢園地で昼食、午後1時頃には大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集 合：野幌森林公園大沢口 9:00

交 通：夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

【ウトナイ湖】2015年11月8日(日)

晩秋のウトナイ湖にはこれから南に向かったり、近郊で越冬したりするハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、

子、岡部良雄・三冬、栗林宏三、河野美智子、佐々木裕、志田博明、漆崎 修、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、高橋きよ子、高橋宣子、立田節子、田中志司子、田村修一・裕子、戸津高保、中島房子、中正憲信・弘子、中村 隆、西尾京子、新田啓子、温井日出夫・潤子、畑正輔、早坂泰夫・みどり、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、村田睦子、山室ゆかり、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子、鷺田善幸・幸江 以上45名

【担当幹事】佐々木裕、島田芳郎、清水朋子、戸津高保、早坂泰夫

カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木に止まっているかもしれません。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼食をとることになります。

集 合：野生鳥獣保護センター前 9:30

交 通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意ください。)

☆集合場所等については、愛護会ホームページ「探鳥地紹介」でお確かめください。

☆探鳥会の問い合わせ先

北海道自然保護協会 ☎011-251-5465

10:00~16:00(土・日曜、祝祭日を除く。)

鳥 民 だ よ り

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前入りカレンダーを販売します(1部1,200円)。お渡しは11月ウトナイ湖探鳥会と12月野幌森林公園探鳥会となりますので、申込時に受け取り場所をお知らせください。

申し込み先 品川 011-571-6915

小堀 011-591-2836

【新しく会員になられた方々】

本杉 政司・朋子(札幌市白石区)

金子 喜映・洋子(札幌市厚別区)

小林 弘輝・尚美(札幌市豊平区)

【北海道野鳥愛護会】 年会費 個人 2,000 円、家族 3,000 円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>